

左の記事を読んで、下の問いに答えましょう。

1 傍線部①はどんなことだと言っていますか。解答欄に合わせて本文中から16字で抜き出し、最初と最後の3文字を書きましょう。

戦争について、これでいいのかと疑問に思いつつ

			～			
--	--	--	---	--	--	--

2 長官はこれから人々にはどういうことをしてほしいと言っていますか。解答欄に合わせて本文中から33字で抜き出し、最初と最後の3文字を書きましょう。

			～			
--	--	--	---	--	--	--

3 傍線部②について、記者はどんなことをしてはいけないと言っていますか。本文中から15字で抜き出し、最初と最後の3文字を書きましょう。

			～			
--	--	--	---	--	--	--

4 傍線部②について、記者にはなにが必要だと言っていますか。本文中から15字で抜き出し、最初と最後の3文字を書きましょう

			～			
--	--	--	---	--	--	--

毎日新聞大阪本社の記者で、後に論説委員として健筆を振るった藤田信勝（1980年没）は敗戦1週間後の45年8月22日、大阪警備府の司令長官（海軍中將）に会いに行く。藤田の日記「敗戦以後」によると、長官最後の記者会見だった。海外駐在の経験も豊富だった長官は自らの敗戦責任について、こう語ったという。

「（日中戦争が本格化した）昭和12年以来、これでいいのか、これでいいのか、と幾度思いつつも大勢に引きずられてきた」。それは自らの地位が組織の最高位級でなかったことにもよるが、「自分の地位の影響力の範囲で、職を賭して主張する勇気がなかった」からでもあると自戒する。そして藤田ら記者に向かってこう告げた。

「これからの世界の動きを見る上に、小さな波にまどわされず、大きな波をよく見きわめること！徹底的に掘り下げて考えてみると、そして一つの結論に達したら自分の影響力のおよぶ範囲でいいから強く執拗に主張する勇気をも



高田 昌幸

NIEワークシート中～高校

現代に連なる「敗戦以後」

随想

つこと」。その上で「若い諸君の力は絶大なのだ」と結んだ。以後、敗戦の混乱の中で、藤田は考え続ける。そして2年後の7月、「敗戦以後」の最終ページで彼はこうつぶった。

②「われわれは何をなすべきか。次代への道の地ならし、それは長い、破壊された道であり、その仕事は苦しいかもしれぬが、われわれはそれをしなければならぬ」。私も身を置くジャーナリズムの世界では、先人たちが散々市民を欺いてきた。だから記者の務めとは「もう二度と市民をだまさないこと」に尽きる。そのためには記者が何者かにだまされてはならず、だまされないために圧倒的知識と現代史への深い理解が必要だ、と常々強調している。

大阪警備府の長官に射抜かれたように、戦時中の藤田もまた日本のおかしさに気付きながらもそれを紙面で伝えなかった。勇気がなかったのだ。われわれは、その愚を繰り返していかないだろうか。

（東京都市大教授）

NIEワークシートのこたえ（2025年8月25日公開）

◆ワークシート「主張する勇氣(国語)」 2025.8.22付 夕刊 1面 解答

- 1 職を賭 ～ かった
- 2 自分の ～ つこと
- 3 もう二 ～ いこと
- 4 圧倒的 ～ い理解